

今回の震災と個人的生き方

新潟県医師会理事

柳原俊雄

これまでさまざまな災害に見舞われてきたわが国であるが、今回の大震災は、国民全体が災害を自身の問題として正面から向き合わざるを得ないという未曾有の大災害であった。

個人的には、この地球の危うさ、日本という国の自然災害に対する弱点、いつどのような災害に遭ってもおかしくないという日常生活の中での危険度、というようなことを考えさせられた。医療という現場にいて、われわれは疾病予防、延命治療、そしてより有効な治療を求め続け、いまや世界一の長寿国となったが、今回のような大災害で多くのかけがえのない命が一瞬のうちに失われてしまうと、ある種のむなしさを感じる。

今回の震災の経験から私は以下の三つのことを再認識させられ、それと同時にこれからもその意識を持ち続けたいと思っている。

1) 安全神話というものはあり得ない

生きることは危険であり、われわれは常にその危険度を少なくすべく努力しているのである。世の中に絶対安全などというものはなく、あらゆる

分野で軽々しく安全や安心を口にしたり、逆に安全性に対してそれが裏切られたときすぐに騒ぎ立てるべきでない。今回は原発事故で特にそれを考えさせられた。私自身は脱原発を目指すべきと思っているが、声高々に訴える気持ちはない。

2) 相互扶助の精神を持ち続ける

余裕のあるものが緊急事態にあるものを援助するという、ごく当たり前のことが、この震災で多くの日本人の行動として現れた。もしかしたらすばらしい国民性ということになるかもしれないが、平穏時にこのような思いを持ち続けることができるだろうか。また今後国民全体に余裕がなくなることも予想されるが、その時はどうなるのだろうか。それでも助け合いの精神は忘れない。

3) 快適さ、便利さに幸せを求めない

スローライフ、回り道、寄り道、鈍な生き方を残された人生において大切にしたいと思っている。快適さ、便利さを追い求めることはやめたい。